

## 行動生態学は何処へ

中村雅彦

鳥学ニュース編集者の江崎さんから最近の行動生態学の動向と今後の見通しについて一筆書いていただけないかとの御依頼がありました。大学受験の際の「傾向と対策」のような話をうかつにもお受けしたのですが、年度末で忙しい折り、また研究室の引っ越しも重なり、参照すべき論文や本も何処へいったかわからない状態でこの巻頭言を書いています。したがいまして、会員の皆様はこの原稿を私個人の感想として肩肘張らずに読んでいただければ幸いです。

「行動生態学はもう古い」とか「行動生態学は頭打ちだ」、という言葉をしばしば耳にすることがあります。実は似たような話題が、個体群生態学会では、かなり以前から「行動生態学」をそのまま「個体群生態学」に置き換えて中堅研究者や若手研究者を中心に活発に議論されています。いつの時代にも、どの学問領域でも定期的に必ずでてくる話題だと思えます。それはファッションと同様、学問領域にも流行があるからです。私が鳥類生態学を本格的に志し始めた頃、行動生態学は新しい学問として、日本では特に若い研究者によって導入され、今日では当たり前前の学問として受け入れられています。当時私は、どちらかという記載科学としての色彩が強かった生態学が理論的背景を得て、仮説や予測の設定が可能となり、実証的に野外研究ができるという心強さを感じた記憶があります。

では、行動生態学はもう古いのでしょうか。私はそうは思いません。国際鳥学会議に参加しても国際行動生態学会の講演要旨集を見ても行動生態学的研究は現在、ますます盛んであることが実感されます。また、毎月のように送られてくる鳥類学や生態学関係の雑誌にも膨大な量の行動生態学的な研究が掲載されており、私にとっては情報過多の状態が続いています。行動生態学は70年代から80年代の急速な発展期を終え、現在は学問的な安定期にあるという印象を持ちます。

しかし、具体的な研究テーマには新しいものと古いものがあります。日本鳥学会の伊藤基金で旅費をいただきニュージーランドで開催された国際鳥学会議に出席したとき、DNAフィンガープリントによる父親判定や種内托卵の判定は発展期で、様々な可能性や技術的な議論が多かったのですが、一昨年ウィーンで開催された国際鳥学会議では、手法そのものが表題に書かれているものはあまりありませんでしたが、配偶戦略の発表のほとんどが、というか猫も杓子もDNAフィンガープリントによる分析を当たり前のように取り入れていました。また、研究テーマとしては非対称性のゆらぎの問題とか性選択は現在活発な議論がされています。その一方で、90年代を境に採餌行動に関する研究は、繁殖戦略に関する研究がうなぎのぼりで多くなるのとは対照的に激減しています。私はだからといって採食行動を扱った研究が古いとは思



## 巻頭言

ませんが。

繁殖戦略に関する研究に限れば、全体的な傾向として、前述した遺伝子レベルの研究や野外実験を積極的に取り入れ、生理学や保全生物学などの絡みが多くなってきています。したがって個人の研究というより、金も人も多く使う協同研究が多く、第一著者を入れ換え、テーマごとで著者をふった論文が見受けられます。人間はだいたい似たようなことを考えます。発想とか着眼点は日本人は欧米人と比べあまり遜色はないと思いますが、問題はその後です。日本人は単独でこつこつやるのですが、欧米人はチームを組んで、しかも使いなれた英語で日本人の半分のスピードで論文にしまいます。と、いうことは我々日本人は欧米人より数年早く新しい発想や着眼点を持たなければ競争には勝てないわけです。生物学がビッグ・サイエンスとなって20年。アイデアができれば後は競争。圧倒的な人力と経済力をもつ者が金脈を掘り尽くす他の生物学の分野と同じ構図が行動生態学でも見えかくれています。

現代の物理学は理論物理学と実験物理学に大きく別れ、理論と実験の相互関係の中で発展してきました。現在の行動生態学は、数理生態学や理論生態学が先行し、その後を検証のために実験や観察が後追いをしている印象もあります。理論の検証のためには、関連理論の理解はもちろん、適切な実験・観察計画とデータ解析が必要となります。これにはどうしてもそこそこの訓練や時間が必要となります。そのためアマチュアとの格差がますます広がる傾向にあると思います。しかし、生態学の発展のためには、理論や検証を通しての一般法則の発見と個々の生物の実態の把握の両方が常に存在し、そのどちらかが尊いというわけではありません。中村登流先生と原色日本野鳥生態図鑑（保育社）を執筆したとき、とりわけ極東に分布する鳥類の基礎的な生態資料がないことにはずいぶん泣かされました。個々の種の生態の把握は必要です。

かつての編集委員の成末さんから若手インタビューの取材を受けることなく、年だけは中堅になってしまいました。私自身は、現在も継続中のイワヒバリの研究を行動生態学的というよりはかなり広範な視点をもって進めているつもりです。11年間に乗鞍岳に生息した約700個体のイワヒバ리를職別し、現在も個体群生態学的な研究を続行していますし、その間餌資源と繁殖生態や社会構造との関係を実験的に検証してきました。行動生態学的な仕事としては、雌の視点から社会構造を見直す研究も継続中です。私はどちらかというと、学問的な流行を考えながら研究を進めるというより、自分自身の疑問を最優先し、事象を直観的に把握する研究スタイルをとります。現在は、イワヒバリの研究の次に何をするのか捜しあぐんでいます。特に行動生態学的な研究の視点が定まらない状態です。いくつかのテーマもないことはないのですが、先が見えるのであまり気乗りがしないのです。私個人の問題としては、(多分に勉強不足のため)行動生態学は頭打ちなのかもしれません。

(上越教育大学自然系理科生物)

鳥学ニュースの巻頭言は本号より、現在活躍中の中堅、若手の研究者に学会に関わる各分野の最先端を語ってもらうシリーズとなります。どうぞ御期待ください。

## 関連学術会議

- |            |                                  |
|------------|----------------------------------|
| 8月20～24日   | 第7回国際ライチョウシンポジウム（フォートコリンズ：no.57） |
| 9月2～6日     | 第3回国際ペンギン会議（ケープタウン）              |
| 9月18～20日   | 日本動物学会第67回大会（札幌）                 |
| 9月23～24日   | 橘川次郎教授退官記念集会（ブリスベン：本号）           |
| 9月29～10月4日 | 第6回国際行動生態学会議（キャンベラ：no.55）        |
| 10月2～5日    | 第2回国際猛禽類会議（ウルビノ・イタリア：本号）         |
| 12月1～8日    | 第9回パンアフリカ鳥学会議（アクラ・ガーナ：no.56）     |
- 関連分野の学会大会・シンポジウムに関する情報をお知らせください（〆切：2カ月前）

## 第7回北アメリカ・ツル・ワークショップに参加して

渡 辺 剛

昨年、「ツル類の現状と保護研究への展望」という題で日本ツル・シンポジウムが北海道・釧路で開催されている。日本のみならず、ツルを保護する目的で北アメリカでもこのような集会在3-4年に一度開かれている。今回、北アメリカ・ツル・ワークショップに参加してきたので、その様子を簡単に報告し、感想を少し述べてみたい。

1996年1月10-11日の2日間、ミシシッピ州の南端にあるプロクシーというリゾート地で、第7回北アメリカ・ツル・ワークショップが開催された。一時は、アメリカ合衆国政府の活動停止と東部の大雪とが重なり、不参加者が続出すると思われたが、意外にも約80名近い“ツル人”が顔を揃えた。参加者は、カナダ、アメリカ両国政府機関、自然保護団体そして大学研究機関からの研究者が多かった。研究者の集まりという何か堅いイメージがつかまとうが、ワークショップは終始なごやかに進められ、初めて参加した私でも違和感を感じなかった。そのため楽しく他の研究者と接することができ、彼らから最新の北アメリカ・ツル事情を吸収することもできた。

このワークショップの目的は、ツル研究者間の情報交換の場として、ツルに関するさまざまな研究を報告しあうことにある。2日間にわたるこのワークショップは、研究内容により5部門に分かれ、それぞれの内容は、1) ツルの繁殖生態と行動、2) ツルの飼育管理、3) ツルの野生復帰活動、4) 生息地保護、そして5) ツル医学と合計32題の発表であった。発表内容はどれも興味深く、なかには予想もつかないおもしろいものもあった。

例えば、ここ数年活発化しているツルの野

生復帰活動は特に注目を浴びていたように思う。“刷り込み”を考慮し、ツルの仮装を着てひなを育て、その後一人(羽?)立ちした若鳥たちを野に放すことはよく知られている。このようにして絶滅危惧種であるアメリカカシロツルの野生個体群づくりがフロリダで始まり、早くも3年目が過ぎた。フロリダ州野生生物管理部の調査員から近況として、数番いの確認と今春の繁殖第1号への期待が報告された。

さらに今回は、これらの野生に戻されるツルたちに渡りを教えるというおもしろい実験が、アメリカ野生生物局から報告された。トラックと軽飛行機に馴らされたカナダツルの幼鳥たちが、それらの後を追いついてを学ぶという実験である。昨年の秋8羽のツルがトラックの後方を追い約600kmを渡り、7羽のツルが軽飛行機の後方を追い約1200kmを渡ったという報告であった。今春のツルたちの行動が興味深い。また、軽飛行機から撮影したツルの様子もビデオ公開され、間近にみるツルの飛行生態に参加者は感銘を受けていた。

今回、北アメリカ・ツル・ワークショップに参加して、ツルを保護する人々の熱意と意気込みがとても強く伝わってきた。ツルという鳥を保護するため、基本的な生態研究から、予想もつかぬ大規模な実験まで幅広く研究が行われている。政府機関、多くの保護グループそして大学研究機関が力を合わせ保護に力を注いでいるのである。活気あふれるこのワークショップに参加して、私にはツルたちの未来が明るく見えた。

(在アメリカ)

## 関連学術集会の参加報告・印象記の募集

- ・タイトルも含め1000~1500字程度
- ・一行文字数20字のワープロ打ち(あるいは原稿用紙を使用)
- ・送り先: 〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部  
動物社会学研究室内 水田 拓宛  
TEL: 06-605-2584 FAX: 06-605-2522

## 信州大学教育学部生態学研究室

中村 浩志

信州大学教育学部の生態学研究室は、理科教育専攻の学生のうち、生物学の中でも特に野外での動植物の生態研究を希望する学生が所属する研究室である。学生は、二年次の5月までに卒業論文の研究テーマを決め、卒業まで3年間かけて研究を行うことになっている。また、学部卒業後はさらに修士課程に進学し、さらに2年間研究を続けることも可能である。10年ほど前までは、所属学生の多くは長野県出身者であったが、最近では県外者がほとんどを占めるようになった。

学部から車で15分のところに千曲川、20分から30分に飯綱高原や戸隠高原、一時間ほどに北アルプスなどがある。自然に恵まれているため、野外調査のテーマや材料には事欠かない。研究したいテーマを持って入って来た学生や院生は、そのテーマで研究可能であるが、そうでない学生には毎年4月に教官の方からいくつかのテーマを出し、その中から学生が選択する。研究室の教官は、一昨年亡くなられた羽田健三教授の時代からずっと鳥類生態学が専門であるので、所属学生は鳥の研究ばかりしていると思われがちである。しかし、鳥の他に昆虫、魚類、両棲類、哺乳類、さらには植物まで、学生の研究テーマは多様である。

鳥を研究する学生は、最近では2つのグループに分かれている。1つは、カッコウなどの托卵鳥を研究するグループである。カッコウの托卵行動、社会構造、托卵される鳥のカッコウに対する攻撃性、卵識別能力など、一人毎に異なったテーマで研究を行ってきている。特に興味深いのは、20年ほど前からカッコウの新しい宿主となったオナガとの関係である。対抗手段を十分持っていなかったオナガは、最初一方的に托卵され、托卵は急激に広がったが、地域によっては短期間にオナガがカッコウに対する攻撃性や卵識別能力を身に付け、両者の攻防戦は地域ごとに異なった展開を見せている。托卵歴の異なる地域でのカッコウ

とオナガの生息密度や托卵率の年変化なども含め、研究室の長期テーマとして調査継続中である。また、昨年より森林性の托卵鳥であるホトトギスの調査も始めた。今後は、ジュウイチ、ツツドリについても調査をしてゆきたいと考えている。

もう一つは、特殊鳥類グループと呼んでいるものである。これまで、1人1種ということで100種ほどの繁殖生態を調査してきたが、現在残された種は調査の難しい種類ばかりとなった。ブッポウソウ、アカショウビン、オオジシギなどを調査してきたが、現在はコノハズク、フクロウ、トラツグミを調査中である。調査は難しいが、おもしろい発見が期待される研究である。この他、しばらく前まではカラス類を研究するグループがあり、カラス2種の生態比較、貯食行動、音声コミュニケーションなどの問題を研究していた。

教育学部の研究室であることもあって、学生は信州の自然に広く接し、学ぶ体制がとられている。毎年5月に一泊二日で行われる研究室主催の「戸隠探鳥会」は、今年で45周年を迎える。一般参加者をも募集して行われるこの会では、鳥だけでなく戸隠の自然全般にわたって学生が解説する。また、志賀高原での「志賀実習」、アルプスでの「臨地実習」、下田での「臨海実習」を通し、卒業までに海から高山帯までの自然に触れて学ぶことになる。さらに5月の探鳥会とならんだ大きな行事として、毎年12月に行われる「信州生態研究会」の研究発表会がある。研究室の学生たちは、この発表会に向けて研究に取り組んでいる。大学院受験者は、試験科目の中に理科教育があることに注意されたい。

## 〔連絡先〕

〒380 長野市西長野

信州大学教育学部生態学研究室

TEL. 0262-32-8106

FAX. 0262-34-5540

## ロシア極東における鳥類調査

藤 卷 裕 蔵

ロシア極東は日本の北に位置し、日本に渡来する多くの冬鳥の繁殖地である。なかでもサハリンや千島は北海道のすぐ近くにあり、日本の鳥相研究の延長上にある地域としても重要である。戦前には日本の研究者によりサハリンや千島で調査が行われたが、その後の調査は不可能であったといつてよい。戦後、日本の研究者がロシア極東で調査できるようになったのは、ペレストロイカが始まった1980年代後半になってからである。その最初の調査は、1988年に行われた日本野鳥の会とソ連科学アカデミー動物研究所との共同の希少鳥類調査である。これは3年間継続し、ナベヅル、オオワシ、コウノトリが調査対象になった。その後は、日口渡り鳥保護等条約にもとづく環境庁の調査、雁を保護する会によるガン類に関する共同調査、ハクガンやシジュウカラガンの回復、日本野鳥の会によるツル類の渡りの調査などがあり、また最近ではビザの取得も比較的容易になり、個人的な調査も行われるようになってきている。これまでの調査結果については、論文や報告書にまかせるとして、ここではロシアでの調査を考えている人のために、調査の舞台裏について紹介したい。

まず、ロシア極東で調査を行う場合、日本で得られる情報が非常に少ないので、調査地選定など、独自で計画をたてるより、ロシアの研究者との共同調査とした方が能率的である。それには、まず適切な共同研究者をさがす必要がある。極東ではウラジオストクの極東大学や生物学・土壌学研究所、マガダンの北方生物学諸問題研究所、ヤクーツクの生物学研究所、カムチャツカのクロノツキー生物圏保護区や太平洋地理学研究所に主な鳥類研究者がおり、海鳥関係では太平洋漁業海洋研究所(TINRO)がある。共同調査で問題は第一に言葉である。研究者であれば(とくに若い研究者)英語でよいが、全ての人が英語を話せるわけではない。また多少英語を話せても、遠慮して使わない人もいる。次が交通

手段と宿泊施設である。調査対象にもよるが、公共交通機関でことたれりということはずもない。運転手つきで車や船外機つきのボートを借り上げる形になるが、これが最も便利である。道路網は比較的ととのっているが(ただし幹線はずれると舗装されていない)、目標とする調査地に入るには川沿いに舟によるか、ヘリコプターによることもある。宿泊施設としては、研究所や自然保護区には野外調査ステーションがあるが、普通は宿泊設備はととのっておらず、民家に泊めてもらったり、テント生活である。前述のナベヅルやコウノトリの調査では、20~40日間のテント生活であった。テント生活は、最初の3~4日は大変であるが、慣れてくると、悪天候のとき以外は非常に快適である。ロシア人はこのような野外調査を「エクスペディチャー(expedition)」といっており、普通日本での調査旅行とはかなり違っている。

装備のうち履物は重要なものの一つである。ロシアでは股下まであるゴム長靴をよく使う。長靴のゴムは厚く、履いてみるとかなりの重さがある。そのかわり丈夫で、倒木の枝などに引っ掛かっても穴のあく心配はない。乾燥した所を歩くときには上半分を折り曲げ、水のある所では股下までのばせばよい。調査地の環境にもよるが、普通野外調査では森林のなかを通ったかと思うと、膝上まで水のある湿地を歩いたり、浅い川であれば歩いて渡らなければならない。歩く環境が変わるたびに履物を変えているひまはない。このゴム長靴は水陸両用の履物といつてよく、少し重いことさえ気にしなければ、これほど便利な履物はないだろう。ただし、最近では製造中止しているようで、入手は難しいようである。最近、私はエゾライチョウの調査を行っているが、費用は交通費、宿泊費、食費を含めて1日に\$100~120を支払っている。前述のように、場所によってはヘリコプターが必要なこともあるが、費用は1時間\$1500以上はする。た

---

だし、物価の変動が激しく、ここに書いたのは一つの参考例と考えていただきたい。また、最近はその部署で外貨獲得のため、学術調査でも入場料をとる場合がある。例えば、ウスリースク自然保護区では外国人の場合入場料1日\$50を要する。このほか、費用の問題として、現在のロシアの経済条件からみて、共同調査者にかかわる費用を含め、一切の費用をこちらで負担する必要がある。

第三に病気の問題がある。ロシア極東南部ではダニがウイルスを媒介するロシア脳炎がある。日本にはこの脳炎のための血清がないので、5～8月に調査する場合には、ダニ対策が重要である。紙面の都合で簡単に述べたが、詳しくは藤巻または雁を保護する会などに問い合わせるとよいであろう。

(帯広畜産大・畜産環境科学)

---

## R R F (Raptor Research Foundation Inc. : 世界猛禽類研究財団) および第2回国際猛禽類会議の紹介

山 崎 享

R R Fは猛禽類の研究と保護に関心のある研究者の会として1966年にアメリカで設立されました。世界的な規模での猛禽類の研究と保護を目的としており、現在は北米・ヨーロッパを中心に世界50カ国以上の研究者が参加しています。猛禽類の生態・保護・生物学・管理等が対象分野ですが、猛禽類は生態系の頂点にあり、自然破壊の影響を最も強く受けることから、猛禽類の生息環境の保護にも大きな関心を持って、問題解決に取り組んでいます。

年に一度、年次学会がアメリカの各州の持ち回りで開催され、猛禽類に関心のある人々の世界規模での情報交換の場となっています。また1993年にイギリスのケント大学で第1回ヨーロッパ大会が開催され、概ね3～4年ごとにアメリカ以外でも学会を開催することになりました。今年はアイダホ州ボイジ大学でアメリカ鳥学会と同時開催で年次学会が開催される他、10月2日から5日にイタリアのウルビノで第2回ヨーロッパ大会(第2回国際猛禽類会議)が開催されます。年次学会には世界各国から猛禽類のバリバリの研究者が集まり、熱心な発表と意見交換が行われます。とくに猛禽類の研究を専攻している大学院生

にとっては登竜門的な存在で、毎年迫力ある発表が数多くエントリーされています。しかし、この学会は猛禽類の好きな人々の集まりだけあって、雰囲気はとて“なごやか”で、保護や教育活動を行っている“おばさま方”も大学の研究者と和気あいあいと交流を楽しんでいます。「海外での開催を近い内に日本で」といつもプレッシャーをかけられていますが、いつかそのような日がくるよう、私たちも頑張りたいと思っています。

ウルビノで開催される第2回国際猛禽類会議の詳細を知りたい方は、下記までお問い合わせ下さい。

SECOND INTERNATIONAL  
CONFERENCE ON RAPTORS  
Local Committee Chairperson  
Dr. Massimo Pandolfi  
Istituto di Scienze Morfologiche  
Università di Urbino, Via M. Oddi  
21-61029 Urbino, Italy.  
Phone : +39.722.328033  
          +39.722.327893  
Fax : +39.722.329655

(日本イヌワシ研究会)

---

## 学術集会のお知らせ

橘川次郎教授退官記念集会

オーストラリアのキャンベラで行われる国際行動生態学会議に先だって、1996年9月23～24日にブリスベンのクィーンズランド大学で橘川次郎教授退官記念集会 (Festschrift Meeting in

honour of Professor Jiro Kikkawa) - 鳥類の進化と行動。長期研究がもたらす洞察 (Evolution & Behaviour of Birds. Insights from Long-term Studies) - が開催されます。

お問い合わせ : Dr Ian Owens, Department of Zoology, University of Queensland, St Lucia, Brisbane, Queensland 4072 Australia E-mail : i.owens@mailbox.uq.oz.au Fax : +61 (07) 3365 1655

日本鳥学会1996年度沖縄大会へのご案内

会 期 :	1996年 9月14日(土)~16日(月)		
会 場 :	沖縄県宜野湾市 沖縄国際大学		
日 程 :	午前の部 (9:00~12:30)	午後の部 (2:00~6:00)	夜の部 (6:30~9:30)
第1日目	各種委員会と自由集会	シンポジウム	評議員会と自由集会
第2日目	口頭発表	総会と特別講演	懇親会
第3日目	ポスター発表	口頭発表	自由集会

\*一部各種委員会は大会前日の13日(金)に開催することもあります。

大会参加費 (講演要旨込み) :

7月15日までは	一般	3,500円	学生	2,500円
7月16日からは	一般	4,000円	学生	3,000円
懇親会費 4,000円				

シンポジウム : テーマ等未定

特 別 講 演 : 「ホオジロシマアカゲラの研究と保全」(仮題)

演 者 : ジェフリー・R・ウォルターズ博士 (アメリカヴァージニア工科大)

講演申込み締切 : 7月15日(月)

以上のような予定で沖縄大会を行いたいと思います。少しでも涼しくなった沖縄で、皆様の鳥談義を楽しみにしています。沖縄大のキャンパスではイソヒヨドリやリュウキュウツバメ、シロガシラなどが皆様をお待ちしています。参加者の皆様には沖縄島内の探鳥地資料なども用意しています。また、海水着の用意もお忘れなく?。詳しい案内は別紙をご覧ください。皆様とお会いできるのを楽しみにしています。(大会準備委員長 : 宮 城 邦 治)

連絡先 : 〒901-22 沖縄県宜野湾市宜野湾 276-2

沖縄国際大学内 宮 城 邦 治

TEL : 098-892-1111(内線7611) または 098-893-7354(直通)

FAX : 098-893-3276

お 知 ら せ

【編集委員会】

先日配布された日本鳥学会誌の最新号 (Vol.44 No.4) に掲載された「日本鳥学会誌投稿の手引き」が、1993年以前の古いものが誤って掲載されていることがわかりました。そのため、以下のように訂正し、お詫びいたします。

今後、手引きが新しく改定されるまでは、一昨年発行されたVol.43 No.3/4に掲載されている手引きを正式なものとして運用する。ただし「問い合わせ先」と「送付先」は、最新号掲載のものとする。

鳥学会誌に今後論文を投稿されます方は、この点に十分注意して下さい。

なお、現在使われている投稿の手引きはわかりにくいとの意見もあり、前編集委員会からの

引継ぎ事項として手引きの改定を検討中です。また、新たに英文の投稿規定の作成も始めていますので、意見等がありましたらお知らせ下さい。

(編集委員長 中村浩志)

【基金運営委員会】

「シンポジウムへ補助金」

鳥学会の基金のひとつに津戸基金があり、会員の企画されるシンポジウム(年1件)に利子を補助金として支給いたします(鳥学会誌37巻4号参照)。

補助金は3万円ですが、今年度にシンポジウムを計画されておられる方は、

- 1) テーマ
- 2) 開催地(可能なら会場名)
- 3) 責任者名
- 4) 講演者の氏名と演題
- 5) 開催日時

などを記して期日までに遠慮なく申し込んで下さい。このうち、1)、4)、5)などは暫定的なものでもかまいません。申込期日と申込先は次の通りです。

申込期日 1996年6月20日

申込先 〒079-01 美唄市光珠内 専修大学 北海道短期大学 正富宏之

(TEL 01266-3-0219. FAX 01266-3-3097)

【事務局】

○1996年4月7日に本年度の第1回常任評議員会が大阪市立大にて開催されました(出席:山岸、藤巻、阿部、樋口(広)、江崎、黒島(事務局))。

○事務局宛に「公益信託増進会自然環境保全研究活動助成基金」に関する公募が届いています。締め切りは5月31日(同日消印有効)です。詳細を知りたい方は事務局までお問い合わせ下さい。

○郵便局の振込用紙が変更になってから氏名を記入されてない方が目立ちます。

必ず住所、氏名、電話番号をはっきりと記入するようにして下さい。

鳥学ニュース No.59

1996年5月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部 動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 山岸 哲

印刷所 丸二印刷

編集 江崎保男・水田 拓